

白水阿彌陀堂

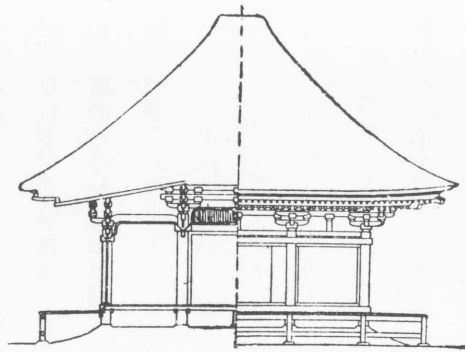
豊岡益人

白水阿彌陀堂は常盤線綴驛より西南約二軒、福島縣石城郡内郷村字白水の地、背後に小高い丘陵を負ひ前方稍ひらけた平地に、南面して建てられて居る。

方三間、單層寶形造、栩膏、周圍に椽を廻らした小堂で、屋上に寶珠形露盤を上げ軒は二重繁極、斗拱は出組、柱は凡て圓柱である。正面中央の一間は二つ折唐戸、西脇一間唐戸、兩側面は夫々前方一間を唐戸とし、他は簀板、背面中央一間唐戸、他は簀板である。内部は床拭板敷、天井は内外陣共に折上小組格天井とし、中央部方一間を内陣とし、簀板に格狭間を入れ、上部に組勾欄を廻らした漆塗須彌壇を後方によせて設け、須彌壇の前面約一間通りを拜所として居る。

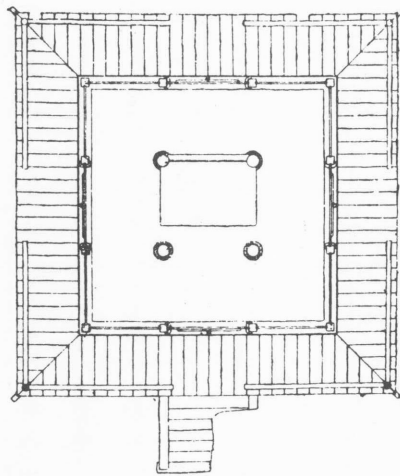
現状は明治三十七年の大修理によつて舊態に復したもので、其以前は

白水阿彌陀堂



(リヨ式様築建本日) 圖面斷及面正堂陀彌阿水白

荒廢甚だしく明治三十六年には暴風の爲堂全部倒潰した由である。従つて現在の材料も此際に増補されたものが多く、露盤、屋根、廻椽、扉等凡て新材に成り、須彌壇も新造である。



(リヨ式様築建本日) 圖面平堂陀彌阿水白

如上の建築機構は藤原時代に隆盛した阿彌陀堂建築の典型で、常行三昧堂の流れを對む一類に屬する。堂内の裝飾方法も従つて之に準じ、壁面、天井、長押等

各所に裝飾畫が描かれて居たと思はれる。現在は大部分剥落し纔に其の痕跡を認むるに過ぎない場所が少くない。比較的舊狀を存する部分の内陣の長押、無目等で今尙鮮麗な色彩を保つた寶相華文様を示し、又内陣後壁の額椽にも同じく多彩な文様を残してゐる。天井の格椽には所々寶

相華文様が認められ、格内には花形を描いてゐる。内陣四柱は、丸鋸と寶相華形の金具を一定の間隔を置いて打ちつけた所謂卷柱で、圓柱全面に彩色を施し、その金具間には佛、菩薩等の諸圖像を描いたらしく極く微かな痕跡を見ることが出来る。外陣長押の一部に僅少ながら彩色文様の痕跡を見るが、他は殆んど新材を以つて補はれて居る。かくの如く、現狀では格別の意味を持つた繪畫は認められないが、當時諸多の阿彌陀堂に採擇された如き、特定の題材を繪いた壁面のあつたことは明らかに推測し得る。例へば内陣の來迎柱間の板壁の如きそれである。現在此の部分は概ね新材を補つてあり、舊材の部も殆んど剝落に委し、彩色の片鱗だに窺ひ得ないが、その額縁に裝飾文様が施されて居ることよりすれば、必ずや或る題材の繪畫があつたことが明瞭であらう。内陣四本の卷柱に於ける圖像と共に、堂内壁畫の意向の一斑が窺はれるところである。今、長押、無目等に明らかに認められる多彩な寶相華文様と、是を繋ぐ胡粉の圓點を配した黒色の線條の手法、及び天井格内に施された花形の様式等は鳳凰堂の裝飾文様の様式に則り、且つ大原三千院本堂、或は豊後富貴寺大堂等に於けるそれと極めて相近きものであつて、内陣後壁及び卷柱等に推測さるゝ繪畫と相俟つて、本阿彌陀堂の堂内裝飾の趣好が全く前記の諸阿彌陀堂のそれと一致することを確かめることが出来る。換言すれば、本壁畫は藤原時代に於ける阿彌陀堂裝飾の常用手段に則つたもので、その一類として貴重な遺例とすべきである。

須彌壇上の諸像の意趣又之に適ふ。

壇上には阿彌陀三尊像及二天王像計五軀の像を安置してある。

阿彌陀如來は大形透彫飛天光を負うて、十二重臺座上に趺坐する。精

細な寄木造漆箔像で、螺髮刻出、肉髻及白毫に水晶を嵌入してある。金箔は概ね剝落し、下地の黒漆が露はれて居る。全像略原初のまゝで、豊麗、端雅な尊容に靜穩の氣満ち、淺い彫りの流麗な衣文と相俟つて溫和な慈光が漲つて居る。

本像の精巧もさることながら、その莊嚴に眼を轉すれば更に驚嘆に値する。光背は薄手の材をふくらみ加減に巧みに透彫りにし、飛天竝に擬寶珠を盛り上げ風に取りつけ、全面漆箔を施す。金箔の保存比較的良く、巧緻を極めた鏤刻眩ゆきばかりである。飛天の彫成、案配心にききまで行き届き、その姿態面貌又なく愛らしい。

臺座は十二重座で、圓味に富んだ薄肉の五遍尊蓮瓣より以下敷茄子、受座、華盤、反花二重丸面框座に及び、概ねその表裏、覆輪等に寶相華其他の藻文を刻み出しにして、秀抜な裝飾を施して居る。漆箔の剝落以外は保存完好、原初の態を失つて居ない。臺座は小形で稍々丈高であるが、光背が大形で且つ圓味を帯びて居る爲に像の安定感を損せず、光背と臺座の關係も微妙に均整し、之によつて像全體の壯嚴味を一段と増して居る。尊像、光背、臺座等各部の様式、手法凡て藤原後期の趣好を物語るものと云ふべく、何れも原初の態を存することは喜ばしい。

因に本像と其の様式手法等類似する一例として茨城縣久慈郡金郷村藥師堂藏藥師如來坐像がある。此像は本像に比すれば損壞の度も甚だしく、自ら補修の部も少くないが、尙其の尊容の様式、臺座の制式等に多大の類似點が見出される。同様式の藤原彫刻の東部に於ける分布を考察する上に興味あることであらう。

脇侍は夫々一手を胸邊に撃げ他を垂れて、唐草文透彫光背を負ひ、八

重蓮華座上に立つ寄木造漆箔像で、二像共にその姿態面相殆んど同じく、化佛水瓶等の彌陀の脇侍たるべき莊嚴を具へて居ない。圓滿な相好、細身優雅な姿態等に主尊と同様な風趣を感せしめ、光背、臺座の手法又全く同一の趣好に出づるものである。本脇侍の光背は現在中尊寺に遺存する菩薩像光背の一種と酷似して居る。中尊寺寶藏には本像を佚した菩薩像光背數點を藏して居るが其内の唐草文透彫光背挿圖参照は形狀、様式、手

木造 光背 (中尊寺大觀ヨリ)

法等此の脇侍のそれと共通で、同一工房の作に成つたかと疑はしむる程である。此の事實は延いて本阿彌陀堂と中尊寺と、兩者の間に密邇な關係あることを示唆し、注目すべき事實である。

二天王像は寄木造彩色、夫々邪鬼を踏まへて立ち、僅か四尺に足らぬ小像ながら、刀法俊銳、技巧細心、胴のあたりを引緊めて、臂を張り衣文をなびかせた輕快な動作の表現に苦心が窺はれる。忿怒尊ながらもその相貌は比較的穩和に悠揚迫らざる態に仕上げられて居る點などに藤原

時代の時代的特徴を具へて居る。阿彌陀三尊と同時の製作であらう。

以上の諸像は何れも藤原彫刻の典型的様相を持ち、主尊の如き定朝様式の一班に位すること明瞭な作品であるが、姿態の肉付け、尊貌の表出等に定朝佛本來のすがたとは既に或る隔りを見、時代の降ることを感せしめると同時に端雅、溫順な面相の表現を有し乍らも、尙嚴肅な漲溢した表情に缺くる點などに地方色を蔽ひ切れぬ憾がある。これは光背臺座の彫出についても同様である。然し乍ら斯くの如き部分的な遺憾は、何等像全體の出來榮えを傷つけるものではあるまい。殊にこの五躰が混然融合して醸し出す壇上の雰圍氣は、堂全體の風調と共にいみじくも尊き藤原の佛の慈光を偲ばせて、唯々讚嘆の聲を放たしむるのみである。壇上の諸像は恐らく當初より此の儘であつたと推測される。強いて穿鑿すれば二天王は四天王の一部ではないか、又此外にも佛像を安じてはなかつたか等の臆測も生れるが、何れも相當らざるものであらう。本來阿彌陀堂に於ける佛像は其の時處によつて區々で、何等制規の律すべきを持たず、例へば鳳凰堂、法界寺の如きは阿彌陀如來一尊を安じ、大原三千院本堂、富貴寺大堂等の阿彌陀堂は阿彌陀三尊を安置し、中尊寺金色堂は阿彌陀三尊、六地藏、二天王等の諸像を奉安する。本阿彌陀堂の二天王像も、中尊寺の二天王と同趣に出でたものと解して差支へなかるべく、又壇の面積より推せば、この他に何像かの存在を想像することも困難であらう。

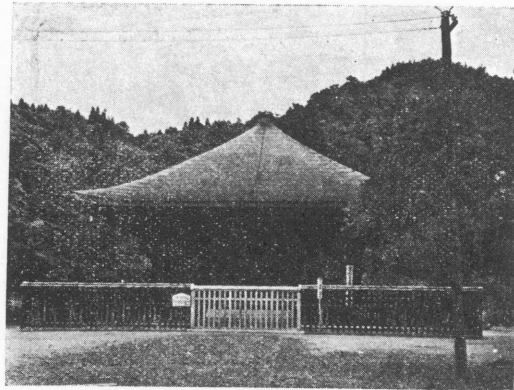
却説本阿彌陀堂は永曆元年に藤原秀衡の妹、磐城次郎太夫則道の室德姫(剃髮して德尼)が平泉中尊寺光堂を摸して創立するところと傳へられ、盤城風土記、佛寺の項に

白水六角堂

在平城西南十里德尼建焉本尊阿彌陀行基所彫刻而與平泉光堂佛同作也德尼秀衡妹常陸大椽國香孫平行隆妻也(中略)而後創之所得白水名者假移仙臺平泉名分字白水云城名平字亦假借是國人所傳言也云々

と記して居る。白水及平なる地名の出所に就いては他に適確な文献の據るべきものがないから必ずしも信じ難いが、又一概にも貶し難い。

前述せる菩薩像光背の類似の如きは中尊寺と本阿彌陀堂との密接な關係を裏書きする適切な證據と云ふべく、中尊寺光堂に摸して本阿彌陀堂が造顯されたと考へる事は最も自然ではあるまいか。地名の依存關係又却くべきではなからう。永曆元年なる製作年代も佛像竝に壁畫裝飾の様式より推して略相近きものと云へる。



白水阿彌陀堂外觀

平泉中尊寺或は毛越寺等に於ける宏壯なる文化は、藤原三代の榮華を物語る偉大な業績として其れ自體既に注目すべき美術的價值を有するものであるが、一面には中央文化の地方移入の證據としての其の文化史的意義も亦没却し難いものと云はねばならぬ。藤原清衡以下三氏の間上方の文化を東奥の地に移植し、以て上方と對抗すべき文化的中心を樹立

四

せんとした事情に關しては今更めて述べるまでもないが、藤原時代の末に至つては中央文化の地方的發展の兆候が全國的に次第に明瞭な形を取つて現はれて來て居るのである。美術文化に就いて云へば東部に於いて中尊寺、西部に於いては豊後富貴寺を中心とする文化の如きその最も顯著なる例と稱すべきであらう。かくして一地方に樹立された文化は之を中心として、更にその近在の地方に伸張し、次第に文化が普遍性を帯びるに至つたものである。就中中尊寺を中心とする文化の如きは、後に頼朝の鎌倉幕府創立に當つて、中尊寺の二階の大堂を摸して鎌倉に二階堂永福寺を建造したる如く、後世に及ぼす影響も少くなかつた。白水阿彌陀堂の建立も亦是等と略同様な事情に由來するものであらう。建立者と傳へられる德尼の奥州藤原氏との血縁關係を別にしても、尙如上の時代趨勢に顧ればその然るべきを推測するに難くない。同じく當地方に於ける藤原時代の阿彌陀堂建築として看過すべからざるものに、宮城縣伊具郡西根村高倉にある高藏寺阿彌陀堂がある。此の堂は方三間、屋根茅葺、寶形造、舟肘木の素樸簡雅な小堂で、白水阿彌陀堂に比すれば内部莊嚴其他何れも小規模なものであるが、建築様式、佛像の彫刻様式等より推して、藤原後期の造顯たること明らかなものである。奥羽觀蹟聞老志によれば、本堂は治承年中、藤原秀衡の妻女の造顯にかゝると云はれて居る。是又中尊寺との緣由を物語ると同時に、その造顯の事情も亦白水阿彌陀堂と略規を一にするものたるべきを推定せしむるものである。

斯く見來れば白水阿彌陀堂の造顯事情が了解せられると同時に當代の美術文化の趨勢も亦自ら明らかとなるであらう。

最後に白水阿彌陀堂の寺院形式乃至規模に就いて一言すれば、現在で

二天王像

福島 白水阿彌陀堂藏

阿彌陀如來像光背及臺座

福島 白水阿彌陀堂藏



は阿彌陀堂以外に建物は全く遺つて居らず、又文献の徴すべきものも皆無に近い。纔に附近の形勢を以つて推測するの外なき状態である。唯現在、堂の附近前方に小さな池が残つて居り、この池は往時は相當廣い地域に亙つて掘られてあつたものと思はれ、堂の景觀を助けて居たと思はれるのである。此地傳ふるところによれば三門、中ノ坊、小御堂、鐘樓等の諸堂があり、礎石も以前は残つて居た由であるが明らかでない。何れにせよ現状より推して大伽藍があつたとは想像し難く、小規模の寺院と考へて差支へなからう。現在は附近の願成寺の管理するところであるが、この兩者の關係は堂創立の原初に溯り得ない。